

在日中国人の現在を追って 国境を越えた熱き物語

張麗玲さん

一九七〇年代後半、中国政府は「改革開放政策」を進め、以来、来日する中国人の数は飛躍的に増加した。その多くが自費留学生で、言葉も文化も異なる日本での生活に、夢だけを抱えて踏み出していく。その人々の日本での生活を一台のカメラで追った女性がいる。張麗玲さんも在日中国人である。撮る者、撮られる者の熱く懸命に生きる姿は私たちに何を訴えかけるのだろうか――。

文＝足立義子



ちょう・れいれい

●1967年、中国・浙江省生まれ。(株)大富社長。89年、来日。東京大学大学院を修了したのち、95年、大倉商事に入社。98年、中国中央電視台の番組を放映する衛星放送のチャンネルCCTV大富の社長に。一方95年からOLをつづけながら、中国人留学生約315人に日本での生活を3年がかりで取材し、約1000本のビデオに収録。それをもとに10本シリーズ「私たちの留学生活～日本での日々」を制作、中国各地と日本で放映され、話題を呼んだ。

夢を持つ大切さを
多くの人に伝えたい！

自費留学生として、成田空港に降り立つ多くの中国人たち。言葉もわからぬ異国の地で不安気に立ちすくむ。そんな人たちが一人ひとりに母国語で話しかける一人の女性がいた。「どこ出身？」「誰か迎えにくるの？」「そして、今からあなたの日本での日々を撮影させてください」と頼む。OKの返事をもらおうと、たちまち二、三人のスタッフが撮影をはじめた。スタッフを率いるのがさきほどの女性、張麗玲さんだ。

張麗玲さんはOLとして働きながら、中国人留学生のドキュメンタリービデオを制作する。その張さんを追ったテレビ番組が、昨年末フジテレビで放映された。「自費留学生」という不安定な立場で、ときにギリギリの

生活を強いながらも前向きに生きる中国人留学生の日常と、心身ともに追いこまれながらも、たくさんの人々に支えられ、番組制作を成し遂げた張さんの真摯な姿がオーバーラップし、番組を見た人々に大きな感動を与えた。

張さんは中国で女優として活躍し、その地位を築いていたが、心のどこかに外国に行ってみたという希望があった。その希望を捨てきれずに一九八九年、成田行きの飛行機に飛び乗った。「外国といってもどの国にというのではなく、またこれといった目的もありませんでした。日本にということではなく、とにかく外国に出てみたかった。そして自分がそこで体験した出来事を、その出来事を通して感じたことをとことん味わってみよう、それだけを決心していました」



数人のスタッフで撮影をする張さん。技術よりも、「何を伝えたいのか」に的をしぼり撮影がつづけられた

到着後すぐ、張さんは心を奪われる光景に出くわした。同じ飛行機から降りた同国の人々の表情だ。

「見知らぬ国でとまどいもあったのでしたが、それ以上に目の輝きが印象的でした。経済大国日本で学びたい人、お金を稼ぎたい人……。それぞれ事情があるのですが、大きな目的と夢を持っていることがひしひしと伝わってきました」

一九七〇年代後半、中国では「改革開放政策」が進められ、外国資本や技術の導入、対外開放が奨励された。その結果、国内ばかりに注がれていた人々の目が、一気に外国へ向けられることになる。国の外で起こっていることをこの目で見る事ができる、そして自分の意思で外国に行くことができる。飛行機から降り立った人々の目の輝きには、こんな事情があったのだ。「改革開放政策」という中国史に残る政策が、外国に旅立って自分の夢をかなえようという人々を生み出した。彼らのほとんどは、「こんにちは」ぐらいしか話せず、生活の糧を得る手段の当てもなかった。その人々が見知らぬ国日本でどのように生きようとするのか。張さんは、その

歴史的なひとこまを映像の記録として残したい、そして、夢を持つことの大切さを多くのの人々に伝えたいと思った。

成田空港に降り立ったとき、期せずして生まれた張さんの「小さな夢」は、以後、日本の大学で勉強をしたり、OL生活をしている間も消えることなく、歳月を経て、少しずつかたちとなっていく。

熱意があれば きつとわかり合える

九五年、東京学芸大学大学院を修了後、東京の大手商社「大倉商事」に入社した張さんは、会社員として忙しくも充実した日々を送っていた。しかし来日初日、空港で見たあの光景や、人々の目の輝きが片時も頭から離れることはなかった。

「自分が動かなければ、何もはじまらない」。張さんはドキュメンタリーの分野で名が通っている、フジテレビの横山隆晴プロデューサーにいきなり会いに行った。横山さんとはまったく面識がなかったが、撮影に関して素人の張さんの話にじっくりと耳を傾けてくれた。そして、張さんの熱意に打たれた横山さん



は、撮影のバックアップを約束してくれた。
「その時点では、番組にまともたとしても、放映される予定はまったくありませんでした。もちろん、撮影にかかった諸費用は持ち出しのため、給料のほとんどが消えてしまいました」
たとえ放映されることがないとしても、張さんの情熱が衰えることはなかった。何十年か後誰かの目に中国史のひとこまを記した資料として受け止めてもらえたら、それで充分だった。こうして撮影を開始したが、

なにかもが手探り状態だった。撮影技術も持ち合わせていなかった。また撮影では個人的な部分まで踏みこまねばならない。しかし当然のことながら撮影をお願いする人のほとんどが、詳しい事情を話したくない。しかし張さんは、時間の許す限り、多くの人々に連絡を入れ近況を聞き、積極的にコミュニケーションをはかった。
「なかにどんなにお願いしても撮影を受けていたくない人がいました。協力してくれるよう一年間説得に当たりました。最後

には、「私が人間である限り、張さんのお断りをお断りすることはできない」と言ってくださり、その人は撮影を許可してくださりました」
そして、「同じ血が流れている人間同士、誠意と熱意を持って接すれば、わかり合えないことはない」という張さんの信念が、たくさんの人を動かしていた。日本人のプロのカメラマンが、ボランティアで撮影の協力を申し出てくれたり、勤務先では上司や同僚が張さんを応援してくれた。
私を受け入れて理解してくれ

「何も起こらなかった日、心に感じるものがなかった日は後悔をしよう」と張さん

る人のためにも、仕事にも撮影にも、持っているすべての力を注いで臨もう——。張さんの決意は新たなものとなった。
しかし自分の意思とは反対に、体が悲鳴をあげた。文化の違う国での会社勤めに加えて、夜と休日を使つての撮影作業で、睡眠時間が二、三時間という日々がつづいた。遂に過労で倒れ、入院を余儀なくされてしまう。

家族という大きな支えがあったから

入院中の張さんを励ましたのが撮影スタッフ、会社の仲間、そして撮影に協力してくれた人々だった。特に張さんを元気づけたのが、取材した人々の異国で懸命に生きる姿だ。病床の張さんは撮影続行の意欲をかき立てられた。
希望を持って来日したはずの中国人留学生を待っていたのは、経済的に苦しい状況だった。ほとんどの人がアルバイト収入で、生活費に加え、学費などもまかなっていた。しかし張さんが撮影をはじめた頃は、日本は不況の長いトンネルに入ろうとする時期で、そのしわ寄せは真っ先に外国人労働者にまわってきた。なかに職を失い、収入の道を閉ざされる人もいた。しかし彼らは夢に向かって歩みつづけた。博士号取得のために何年も論文を書き続ける夫と、それをパートナーの収入のみで支える妻、少女の一家三人を追った「私の太陽」も、ひたむきに生きる姿を描いた作品だ。
つましいながらも、一丸となって暮らしている三人に事件が起こる。博士号を取得し、祖国に自分の学校を建てたいという夫の夢のため、妻が長年かけて少しずつ貯めた四百万円を、詐欺事件にひっかり失ってしまふ。事件のショックで夫婦関係はうまくいけなくなり、別居して生活するようになった。だが、ほどなく和解し、また夫の博士号試験を目指して、一家は支え合う日々を送るようになる——。

映像には財産を失いどん底に突き落とされながらも、悲しみ、苦しみ、喜びをわかち合う家族のきずなが描き出されている。張さんは、三人を追いながら自分を支えてくれる故郷の「家族」の存在を思わずにはいられなかった。

希望を持って来日したはずの中国人留学生を待っていたのは、経済的に苦しい状況だった。ほとんどの人がアルバイト収入で、生活費に加え、学費などもまかなっていた。しかし張さんが撮影をはじめた頃は、日本は不況の長いトンネルに入ろうとする時期で、そのしわ寄せは真っ先に外国人労働者にまわってきた。

「中国に住む家族は、成果が出ないかもしれない撮影に、当初反対した。しかし幼少の頃か

ヒューマン・ドキュメント

在日中国人の現在を追って ～国境を越えた熱き物語

「小さな留学生」 日本に留学し職を得た父親の後を追ひ、母親と初めて来日した少女の2年間を追う



ら決めたことは絶対に実行し、決して後に引かない子どもだった私を、最終的には応援してくれたのです」

あらゆる面でいちばんの理解者は両親だった。張さんは四人姉妹の二女で、姉である張さんが大好きという妹は、姉を追って来日し、東京の張さんのアパートと一緒に住み、家事いっさいを引き受けた。また姉や義兄は長年続けていた仕事をやめ、

今度は私が 感動を与えたい

すべての時間を張さんのために費やした。このような家族の協力なしには、撮影は続けられなかっただろう。張さんは「私の家族にとつては当たり前のこと」と言うが、最近の日本ではあまり見られなくなった家族のきずなが中国にはまだ残っているのだ。こうしてたくさんの方の支えを得て、遂に一〇本のドキュメンタリー作品が完成した。

そんな張さんにいくつかの転機がやってきた。九八年、勤務先の大倉商事が筆頭株主となって立ち上げた衛星放送スカイパーフェクトTV^{ライブ}を放送する「株式会社大富^{ライブ}」の社長に就任したので。

しかし社長就任から数か月後大倉商事が倒産、連鎖倒産も危ぶまれたが、持ち前の粘り強さで奔走した結果、数社から融資を受けることに成功し、「大富」は危機を乗り切った。ほっとしている張さんにうれしい知らせが届いた。編集したドキュメンタリーがフジテレビで放映されることになったのだ。一〇本のうち三本が放映されたが、ゴー

ルデンタイムに流された「小さな留学生」は二〇パーセントをこえる高視聴率を上げた。作品を見た人々から、国境を越えた人間の温かな交流が描かれていることに感動を覚えたという感想が寄せられた。

そして、ドキュメンタリー制作開始から九年が経った今、自分の作品を「満足」という言葉で張さんは評価している。

「私は常に目の前のことに、全力で取り組んでいます。だからあの時点で私ができることは、全部やったという自負があります。もちろん完璧ではないかもしれませんが、私にとつてはあの作品がすべてなのです」

ときには周りの評価など一切



「第27回放送文化基金賞」では「企画賞」を受賞した

気にせず、「強引」ともいえる姿勢で突き進んできた張さんが、一方で、ひとりではどんな小さなことも成し遂げられないことを決して忘れなかった。誰かに支えられることで、さらなる力を得ることができた。だから支えてくれるその気持ちに心えたい。そのためにも、「いつか」ではない、今この一瞬を大切に、そして今度は私が誰かに感動を与えたい――。

そんな張さんの生真面目さが、いつももの大きな決断をさせた。「異国の地で、先行きのわからない未来に向かって懸命に生きている人々がいる。それは悠^{ゆう}久^{きう}の歴史の流れの中のほんのひとこまかもしれないが、ここにこの人たちが確かにいたという事実をどうか忘れないでほしい――」

ドキュメンタリーのなかでナレーターも務める張さんは、このように締めくくっている。切なる願いと多くの人に支えられてつくられた作品は、母国中国でも放映され、それまでの日本人観を覆すものとして大きな反響を呼んだ。それは、人類の歴史のほんの小さな出来事かもしれないが、確かに強く美しい光を放っていた。